

2017年12月1日

## No.69 バグース「日本武道団派遣 始末記」

今年の3月に日本武道館から、マレーシアへの日本武道団派遣のコーディネーターの要請があった。その事をマレーシア人の友人にすると、「会場探しが大変だぞ」と聞かされた。日本武道館から既に会場は、旅行会社を通じて、KL市役所(DBKL)が持っているバドミントンスタジアムを、仮予約していると聞かされた。この場所は、2014年アジア空手道選手権大会の会場で使用されていたので知っていた。手頃な大きさの会場だと思った。

5月になって日本武道館から、この会場はDBKLの市長案件の行事が入ったので、使えなくなったと報告があった。日本武道館では「理不尽だ。我々に理がある」と息巻いていた。私は会場探しをする為のマレーシア政府機関とのコネは全く無いし、私の仕事だとは思っていなかった。日本大使館は、通常業務としてマレーシア政府のあらゆる機関と連絡を取り合っている。日本大使館でも再度DBKLに働きかけると同時に、他の会場も当たると言っていた。

私は、DBKLと我々の日程がかち合った、1週間後が空いていると言うのであれば、その日に変更してシッカリとした契約書を、結んではどうかと提案した。日本武道館では、理事会で決めた日程なので変更出来ないと強硬。私としては、会う人に今回のイベントのお願いをしても、日時と場所が決まっていなければ話にならない。会場が決まらないまま、日本武道館から6月には視察に行きたいと言ってきた。

マレーシアの友人から「Panasonic Sports Complex は如何か」とメールが来た。私は会場探しをする積りは無かったが、Panasonic のこの会場は日本人会が、41 年間も盆踊り大会で使っていたが、参加したことは無かった。日本人会の事務局長に様子を聞くために電話すると、「明日、盆踊り大会の打ち合わせで、スタジアムに行くので、責任者を紹介する」と言われた。

日本人会の盆踊り大会の関係者と現地で落ち合い、初めて会場を見せてもらった。2階に800人の観覧席があり、1階に椅子を並べれば2,000人から3,000人が収容できると聞かされた。我々の予定している演武大会の日程の予約を確認すると、Panasonic が同じ行事で2週間連続で押さえていた。スタジアムの責任者に、我々の予定している日は、空けてもらえないかとお願ひして帰宅した。

その後、日本大使館が他の会場も当たっていたが、「何処も確保する事が出来なかった」と、ギブアップした。その同じタイミングに、Panasonic から会場が使用出来ると連絡が入った。会場問題は解決したのが5月だったので、6月の日本武道館からの視察に間に合った。

日本武道団の派遣事業は、毎年1回世界各国で実施しているが、国により事情が夫々異なり、マニュアルのようなものは無い。日本武道館を訪問した時にもらったのは、日本側の武道9団体のうち、相撲となぎなたを除く、マレーシアにある7武道団体の連絡先。早速メーリングリストを作成し、実行委員会を設立。6月の第1回実行委員会で、過去のデモンストレーションの様子をDVDに収め紹介して、イメージを掴んで貰った。その後、このローカル武道団の協力が、観客動員、会場設営の中核団体となった。

今回初めて日本大使館の人と付き合った。ベトナム、インドネシア大使を歴任した友人の T さんより、宮川大使の紹介を頂き大使にも面会していたので、日本大使館の方からも、一目おかれていたもので、仕事はし易かった。

日本大使館と公益法人日本武道館の人達と、初めて仕事を一緒にした。企業や組織には夫々独自の企業文化、組織文化があり、その風土に基づいて仕事の流儀は異なる。これらの2つの組織が一般企業と異なるのは、お互いに1つの目標（例えば事業計画の達成）に向かって一丸とならなくても、倒産、消滅の憂き目にあうと言う事は無い。従って仕事のスピードは遅くなる。又大使館員は、駐在期間が決まっているので、その間ミスを犯さないように、自分の仕事を安全な範囲に、大幅に狭めているように思えた。

日本大使館は、外務省からのキャリア一組にノンキャリア組と関係官庁から出向している混成部隊。こちらの大学との関係の担当者は文科省から。経済関係の仕事は経済産業省。警備の関係は警察庁。広報文化関係は、地方自治体から派遣されているエリート職員で、総勢で40名の日本人が勤務している。

今回のイベントの担当は、広報文化部。担当者は、英語も良くできるので、外務省の人間かと思ったが、中国地方のある県庁から来たエリート。こちらでは、日本で言えば六本木ヒルズか Ginza Six の様な場所に住んでいる。仕事をしない訳ではないが、自分の仕事は仲介と決めていて、会議の中で予定した結論に導くようにリードをする事は無い。会議の席はいつも端に陣取る。私の様に出しゃばるタイプは、初めて会ったようだ。「谷田さん、宜しくお願いします」と挨拶された。

日本武道館も私の経験とは違った体質がある。日本武道館の課長が6月にマレーシアに来て、視察を終え帰国した。私は出張者が、飛行機に乗って成田に着くまで、7時間もあれば報告書を書いてメールを送る。こちらで視察に行ったり、会議をしている間に、頭の中で報告書を書いているので、時間は掛からない。

出張者の報告書を見せてもらう必要はなかったが、メールをやり取りしている間に、動員数について私が思っている数字と違うメールが来た。出張して来た課長の報告書を見せて欲しいと言ったら、マレーシアから帰国して直ぐに、別の出張に行ったので、1週間後になると連絡が来た。

出張者とは、グループ全員が出張できないので代表して、出張している。その出張者が、自分の行った出張の報告書も書かないで、又新たに出張すればグループ全体の仕事が滞る。私の会社では、海外出張して帰国したら、「時差があつて、徹夜してでも翌日には、上司の机の上に報告書を書いておいた」と伝えた。反論する余地などある筈は無いが、気分を害したのか、メールの宛先が以降、「谷田先生」から、「谷田様」と変更になった。しかし新たな頼み事が発生した時は、「谷田先生」に戻るので可笑しかった。

日本武道館は今回のイベントの主催者。3人の専門スタッフが居て、毎日メールでやり取りして、その後は順調に準備が進んでいた。9月に再度日本武道館から実務責任者が来て、詳細が決まってきた。私の仕事かどうかハッキリしなかったが、駐車場問題を指摘してくれた友人が居た。スタジアムには100台の駐車スペースしかなく、3,000人の来場者を想定すると、乗り合わせ出来ても800台近くの駐車スペースがいる。

Panasonic Sports Complex は、数年前にマレーシア政府に寄贈されていたが、Panasonic の工場群の中にある。現在でも Panasonic は、マレーシアでも 23 の工場が稼動しており、私の松下時代ではマレーシア松下の社長を終えれば、関連会社の社長か、少なくとも関連会社の重役の椅子が用意されていた。

今は管理体制が代わり、23 の工場を管理する Management Company が横串を通しており、この会社の社長が日本商工会議所の副会頭。日本商工会議所も今回のイベントの協力団体になっている。2006 年にマレーシアに来た時は、マレーシア松下の社長は紹介され知っていたが、その後何人も社長が代わり、又組織体制も代わったので、現在の Management 会社の社長とは面識が無かった。

日本商工会議所を通じて連絡を取り、駐車場の使用のお願いに伺った。社長会に諮らなければならないと言っていたが、独断で決定してくれた様だ。スタジアムに隣接する TV 工場とエアコン工場は、当日稼動していたが、合計 500 台のスペースを空けてくれた。

これでほぼ概要が固まってきたが、大会が始まるまでの警備の問題が残っていた。スタジアム内部の警備は SECOM が担当できるが、公道の駐車管理は州警察と Rela(自衛団)の仕事になり、SECOM は手が出せない。

この問題は 9 月に日本武道館の出張者が来た時に、青年・スポーツ省(政府機関)の会議でも議題にのぼり、対応して頂く事になっていた。しかしスタジアムは、セランゴール州にあり、セランゴール州観光局の管理。セランゴール観光局は地元なので、州警察も Rela も良く知っている。セランゴール州の観光局

の会議で「私が担当します」と言った方の名刺をもらっていた。

その後、日本武道館に公道での警備について、「どうなっているのか」と、私がプッシュすると、日本大使館に対処のお願いメールが出た。日本大使館から「貴（日本武道）館でやって下さい」と、青年・スポーツ省経由で入手した Rela の担当者の連絡先が、日本武道館に通知された。日本武道館がこの仕事をやるわけが無いことが分かっているのに、日本大使館との押し問答が始まった。私にも CC が流れてくるので、刻々の事情は掴んでいた。

私が見兼ねて間に入った。確かに青年・スポーツ庁の会議でも警備の件が議題に上り、対処してくれるとの回答を貰っていたが、直ぐに動いてくれた訳ではない。同じくセランゴール州の観光局の会議でも警備の件が議題になり、担当者が決まった。大使館から青年・スポーツ庁は政府与党で、セランゴール州は野党で注意して対応しなければならないと聞かされていたのに、余りにも無神経、無責任。日本大使館に、何故、わざわざ青年・スポーツ庁経由で警備の担当者の名前を調べてくるのか、とクレームをつけた。

青年・スポーツ庁経由でやるのであれば、日本大使館。セランゴール観光局経由でやるのであれば、私がやると名乗りを上げた。日本大使館は、その後何の返事も無く、大会開催まで1カ月を切ってきたので、私がセランゴール州経由で、州警察と Rela の会議を主催して、当日の警備について話し合っただけで決めた。

10月の始めには、ポスター、フライヤー、大会優先入場券も配布して大会準備は、ほぼ終わったと思われた。6月、9月のローカル武道団の実行委員会でも、

大使公邸での歓迎レセプションの話になり、大使館の担当者が「皆さんを、大使公邸のディナーに招待します」と言う発言があった。逆に私から、「そうは言っても、各武道団体に招待人数の枠があるでしょう」とブレーキを掛けていた。

9月中旬になって、今まで何かとお世話になっていた、広報文化部のO部長が大使館のNo.2の公使昇格し、後任にベルギーから女性のK部長が赴任してきた。公使とは何度も食事をしていて、ゴルフもやる方なので、このイベントが終われば、一緒にゴルフをやろうと話していた仲。新任のK部長からは「今後は、私が総括します」と言う、挨拶メールが来た。その後、「谷田さんには、未だご挨拶していないので」と言う呼び出しがかかり、日本大使館でお会いした。

来たばかりで大会準備の進行状況の詳細は掴んでいないので、日本大使館主催のレセプションパーティーの件を聞いた。K部長から「日本から来た武道派遣団の方達だけでやる方向だ」と言われた。私が、過去2回の実行委員会では、「ローカル武道団の方も沢山招待します」と大使館から伝えていましたと言った。今まで発言した者は「本省の意向と予算が判っていなかった」と言われ、流石キャリアー官僚。マレーシアに来て、本庁を向いて仕事している感心した。私も「この件については、大使館マター（事柄）ですから」と引き下がった。

10月の下旬になり、突然日本大使館から「Face book で問い合わせしているが、空手と弓道関係者から、大使館パーティーの出席者の連絡が来ない」と私に連絡があった。私は、Face Book とは使っていないので、使い方、効用は知らないが、「えー！！」日本大使館はFace book を使って、連絡を取るのかと絶句した。ローカル武道連盟の連絡であれば、私がメーリングリストを作っており、

一斉に連絡ができる。連絡が来ないところだけ、プッシュすれば簡単に出席の確認が取れる。今までの私の仕事を理解していれば、こんな事はあり得ないと思った。

日本大使館からは、K部長が来るまでは、10月下旬までには招待状を送り、出席者リストを完成させると言っていた。10月下旬になって出席者の連絡先を探しているのに、「仕事が遅い」とメールを入れ、ローカル武道団から「Short Notice」だと、クレームが来ていると日本大使館に伝えた。それ以降、日本大使館からの私のメールの書き出しは、「いつもご迷惑をおかけしています」という言葉が、最初に来るようになった。

日本武道団の到着の翌日の11月9日には、高村正彦団長以下75名の日本からの派遣団と同じぐらいのローカル武道団の方々が、大使公邸に呼ばれ歓談した。「本庁の意向」より、沢山の人を呼びたい「大使の意向」が優先された。宮川大使から、「これだけの武道の先生方が、大使公邸に来られたのは初めてで、今晚の大使公邸はクアラルンプールで、一番安全な場所だ」と歓迎の言葉があった。

物事を成し遂げるには、「天の時、地の利、人の和」が必要と言われている。

私は2006年12月にマレーシアに来たが、その翌年の2007年に日馬外交樹立50周年記念として、今回のイベントが企画されたら何も出来なかったし、又私にコーディネーターの話が来なかっただろう。正に2017年は、私にとって「天の時」であった。



「地の利」。マレーシアに住んでいて、日本語で日本武道館とコミュニケーションが出来る者、と言うのが今回のコーディネーターの条件。しかし実際は、それ以外に英語の必要性は、現地の政府機関との会議で必要になる事は、言うまでもない。10年間マレーシアに住んで居れば、マレーシアの政治、経済事情と生活体験を持っている。正に「地の利」を得ていたと言える。

「人の和」は言うまでも無い。1人では何も出来ない。日本人会でも剣道部、少林寺拳法部、合気道部はあるが、責任者の名前を知っているが、話したことも無い。今回のイベントを通じて、実行委員会で話し合いをし、日本武道団が到着してからは、毎日パーティーが企画され顔を合わせる。マレーシア滞在10年にして、マレーシアの武道家の皆様と親しく面識が出来た。

駐車場を貸してくれたのは、今までお会いした事も無かった Panasonic の社長。実は、お世話になった日本人会の事務局長も元松下。今回会場の1つになった日本人学校の事務局長も、現地で Panasonic を退職され再就職。今回のイベントの「人の和」は「松下・Panasonic の人との和」でもあった。

この様なコーディネーターの仕事は初めてで、「ああすれば良かった、こうの方がもっと上手くいった」と言う反省の一語に尽きる。大会終了してから直ぐに、「高村先生も大変喜ばれていた」と言う言葉が、日本武道館からもたらされた。